



8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

天保十五

弘化己

一乘馬 上院記

一鳥居前走

嘉慶戊午

一京橋涉水

同二年

一異船三日黑又涉問合

一五路松前草城

一雜事

117
59
14

そそは直つもひい下仕打ちもてはせゆり生まへふ
高臺を京澤を彌戸田がちも左近をあらへたる中條
中務を痛識用以て候ひ下川をあらへたる其子よ
うのち爰多は厚内結御事母を承年をも年幼に
故居の後を三扇の邊を拵年仰半立人一月とくちは深井房
内宮は勤めあり石の在ち小室の力原山御はる清月日極
甲元至承丈一はももとよみてこそ又中主原性班里
隅子を知らず所は多馬川徳中様が走及三重少人所三好
大院門子有連八郎は因所拵平下大人一つに又又
度參をあらへたる事あひれ朝那守も東山大膳亮見作室修羅
内秀紀伊守本多猪五郎の痛識一はす小室の御事原

あらひに於の附て西戸あまくとソレ酒馬の外れとまつた
防護をとるゝいまとまつてまつてこちてとまつてほんと
御室を山城御殿内閣太宰府多聞院徒事石川教馬入室事
酒食事馬事即も人手のひきよつてとまつてあり其乃は酒院
萬若江信豊紅山角を多聞院氣象日暮を松平宗三郎林主
を石川君事亦も人手あらうてとまつて酒
火も家みをゆふ小御子たとくとまつてとまつてのうちとがめ
は鳥主のすゑとくもじりは松島守のたゞとくとまつて
ひもせりに候もわざうかうとまつてとまつてとまつて
のつう馬事とつとくとまつてとまつてとまつてとまつて
とまつてとまつてとまつてとまつてとまつてとまつて

とひのうりにあまくわゆかへむりとひも馬をまわし武士もひを
まわすを草にたるあらわのまつまむを引めくはる
にかくはりきよれといふがこゝれ
久敷とさん清とすとまくまくまくとすよみかはりはり
ともひとこくまうひとひとひとひとひとひとひとひとひと
ひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひとひと

望遠御庵とあります
元向加賀守氏敏
がおらとくらえりあがまにめ（そよかわのりゆ）はちをも
東北（とうほく）とあはれのまきをけりとせん
のまきをけりとせん
以上（じょうじょう）御庵（ごあん）があるとある
樹木（じゆぼく）はあれ樹木（じゆぼく）はあれ

中條、東方子南信社

がうふ何うひて聞へんとおもつゝあらう
まじめの孝子ねまくまくまくまくまく
ほれ不ふとにて
毛をよわの匂ひてやまひりぬれりあらるよ

甲辰新年作
箱葉丹後守正詎

四邊丘草同蕭索，一聲春鶯江上翻。
長髮梳風風上翻。

本多忠政
本多忠政

春風麗日艷陽辰。卽園光景萬里新。
嘉木蒼青山側芳艸萋綠池濱。白櫻花間紫駒馬。
金鞍玉勒照四清。駿蹄蹴踏落花
下。從命欲乘自逡巡。深恐庸愚無所然。
十六更忝鴻恩及小臣。

服坂淡路守安宅

上賜 観諸有司乘馬借以駿馬小臣亦與焉且

命使縱觀林園其出致奇趣廣大無涯目之所未曾矣

臣不堪感激之至因伏恭賦小詩

跨鞍金埒幾來去技拙深羞駁似駕靈園鹿伏魚跳沼假山莊

石廻丸殊

忝命一朝看內園風光恰似入仙源自櫻青柳烟霞裏絕浴

君王雨露恩

初見 腳園泉石豐 君恩盡日醉春風嫩花新柳紅還綠
都在祥雲瑞靄中

正和

松平備中守正和

一正和之保原承やゆる所

增山河内守正修

甲辰三月朔

大昌殿下脚吹上觀辟下調馬事畢

命綏觀苑中勝景恭賦二絕以記寵榮

百花爭繞鳳凰城駿馬翩翩凡脚輕歡樂如今太平日池臺猶

想古人情

水碧山青花木繁流鶯百轉繞芳園望中春色知無際更浴

恩波到歛昏

水野壹政守

手代りてまほりういむとぞよど野のそよ
もまくおまくよらむたのこしたれとりく是をひねりえ
御園の稱れあらわく

滋庭種里主釋稿

今もこの山をのけまくらでやいだすとまよへやまよ

ひやふとまよらうとス

そりゆふじのちまくらゆすはすりあすまおれんと神

御さんのはまをひきまくら

まくらまくらはまのくまくらがまくらわづる山の山くら

まくらまくらはまのくまくらがまくらわづる山の山くら

曲閣和泉を京山

アモリアムアモリアムアモリアムアモリアムアモリ

アモリアムアモリアムアモリアムアモリアムアモリ

圓村伊藤も直臣

アモリアムアモリアムアモリアムアモリアムアモリ

アモリアムアモリアムアモリアムアモリアムアモリ

加多伊藤も直臣

アモリアムアモリアムアモリアムアモリアムアモリ

水野式部

百尺飛泉瑞^霧中山花^新柳綠還紅推敲不尽春園趣好景陶

坐望莫窮

晴明靜日鳥聲喧李白桃紅草色暄移步風前千點處滿庭春

意認詩園

賞花於吹上苑

堀田大隅守一能

百樹百花麗日暄四時佳景貯瑤園鳥吟蛙舌詩情憐共潤昇

平雨露恩

又

林花爛熳競紅粧春鳥弄晴鶯花牆風催雨隨風露到晴天不

寔飽清香

翁生虫羽字彥

まことにあつたる事はあらずや
ぬよにまよひす
はかどりくまゆる
ぬちよひをせんと
たどりゆくがりゆく
て、まじめにわざと
のぞむわざかよ
りもんじよ
作とがゆうて　御高き鳥居の
事却能參るに
多鶴風雲のとくまゆるはれを

ゆうとく又まろびて核外
弓矢やくはまくの弓矢やまくの

大友豊後守義

幾種名園西又東淡妝低面暎春風此花無限尤珍重不讓海棠

春園花笑馬弭驃
楓樹鳶吟白日長
池上風濕禹水漲
圍邊麥綠稻功彰
下問側陋斷千慮
惠篆窮采百祥好
是太平勿忽武又盛
文德服夷疆

右　御園乘馬　上覽之日以臣後其席未為所
命詩賦拙劣之才難不能置一字然無由奉報此
鴻恩故來賦一律奉獻　附下　微臣藤原隆都頓首

いまとちろぬのうりと
りもく うらわひよこちまー
くとどいたなみ もものほをそきじ
しらひはばかたすこり
酒井隱岐守忠夫

社のあらすの神とのまゝ一多忙にひはれどかくと
吹上花はをとすとす。

石虎土伍守政平

約ももよももももももももももももももももももももも
もももももももももももももももももももももももももも

ももももももももももももももももももももももももも

亥の匂也

西子のあらすの神とのまゝ一多忙にひはれどかくと
吹上花はをとすとす。

櫻井彦多半勝也

西子のあらすの神とのまゝ一多忙にひはれどかくと
吹上花はをとすとす。

松平四郎

西子のあらすの神とのまゝ一多忙にひはれどかくと
吹上花はをとすとす。

甲辰三月朔特命當直庶官試馬技又拜見吹上花

坂井右近

大園春景麗花落馬蹄杏鶴舞青松收遊綠水塘箇中雖郭
裏真若入仙鄉共戴君恩厚徘徊到夕陽

春拜觀別花恭賦藍章敢記特恩產未女正寅直

淡綠酣紅萬樹妍遊蜂戲蝶逐香顛紫烟籠處黃鳥轉收

柳絮翻風疑白雪葦滿地鋪青氈定憐芳艸池蘋

路一部蛙声奏瑞年

三月朔朝罷有旨使群僚調馬於吹上園大駕觀

馬既又命縱觀泉石卉木實盛世之隆遇也臣不肖

承乏末班辱冒餘寃畏喜交并恭賦二絕以志慶云

伊東修理大夫祐相

金鑣声動綠紅間內既良駒步驟閑習ニ春風天咫尺伏鞍偏

恠近仙寰

逍遙觀遍內園春嬌鳥瑤芳到处新也識恩波深徹底治中魚

牧躍清淪

大弓内侍とかくもおあひく猶りよりて此の事不
活多きのを乃と多いとぞしたむれりと日月もす

大國音佐とかくもく 陽朔そ一のう伊子日

三室土佐守康直

かうふまはすねをめいたるのを尋ねたゆじく

以上を原文に従ひ筆者と云ひて

久留ひいふをうかまつてはまはまうらは木
松平豊前守政周
毛修うらはまやけりといふをぬくしりこす
がまくもほどの、あくあれてよを敵とのよどみ
不厚せり色立つて行若のまことひそくやまのアレシ

天保甲辰春三月翔適奉 朝命苑中馳馬事畢

瞻

瓦疑

苑中遊瞻趁群英何幸微臣濫寵榮調馬場邊櫻影處卧龍觀
眸水光清蒼松万古流膏老素瀑千春漱玉鳴祗為優恩波及
遍直疑身是到寰瀛

長田六左衛門繁光

堀伊賀守利賢

いちくもあはれを正風す。改めまのぞ已けり。こよ
万葉草木。是のみされ。舟そのうも少くのうちだもそれ
うそねむ處の尾山の松ねく。とくにもふ風す。うる
彦坂えみ夫紹徳

ほのあとうかともす。仄ひあけく。うるべ
賜観花中即事

内藤紀伊守信親

調柵躰脇統竹籬山櫻無霞咲清池三間橋上綠松秀寛政元

泉勝迹遺

浮雲の空をうかともす。仄ひあけく。うるべ

あゆきそよぐのあら多す。多くうきじはくと
ほづく。もは縁す。おだやかす。いもんものあす。

岡部内膳正長和

萬葉草木

嘉永元年八月

京ち故故水

一 京都鶴舞川桂川筋をみ海軍川。大虫を五重井橋往
末止。桂川か。所切。淀堤八萬兩。幸通五万石。切
淀公佐見ど堤。所切。本津川堤。千牛切。多井海通
寺。寺とや前。五百斗切。是を切。因。居事。

一 牧方院多羽伏見。序とと水登。よし。住事。所。移。し
一 淀。御。使。海。此。係。主。人。と。古。成。名。事。所。役。人。手。
一定。御。丈。四。尺。か。岸。川。丈。八。尺。因。本。津。川。丈。大。丈。校
方。と。も。丈。と。尺。神。津。川。言。別。府。役。方。半。半。半。右。と。通
申。來。多。水。知。や。上。以。上。

・ て馬屋
・ 住事

日記
大坂即ち萬葉津岸而高木ノ江戸因爲之紙勿写。

一 畠塚屋あらかわやを先と別重音便處大松子印程折
ナム於後名屋のゆへ破板有しより大方しゆく水
屋子場外馬道とし主事中止此又堂房中一鴻毛毛床と
當りと云ひ大坂橋に止て湯桶音清天神橋止之證
波移上ルレタニ而くまもと屋大路中身は清流也
荒木中止又淀川三土州役屋船越州役屋松屋
き中のそ外伏見町三丁右石さくねあそそと爲
破損つ事

左書ル十日ノ因十三日と大凡あら五更喧通居る右ノ以
往度ひち度あまきみあらす上ヤハ詳以正統と萬年と傳
あら下ノ不思はリ一あらす一清流也以上

省

嘉永二年己酉七月廿日水部屋伊藤大坂守前

支度書

服板渡沙守

牛多中村少輔

主屋家女正

松平元伊守

太田猿津守

叶手山在舊ノ居

牧中野河守

久次兵代守

池田猪鹿守

大月

堀伊賀守

市席

二席

池田流後守

遠山半兵衛

石谷源兵衛

之光市左衛門

戸田佐四郎守

佐野遠江守

杉平河内守

中多華之助

庄川中右衛門

代々木行徳

羽田弘助

三席

四席

五席

六席

七席

八席

九席

十席

十一席

十二席

十三席

十四席

十五席

十六席

十七席

十八席

十九席

二十席

二十一席

二十二席

二十三席

二十四席

二十五席

二十六席

二十七席

二十八席

二十九席

三十席

三十一席

三十二席

三十三席

三十四席

三十五席

三十六席

三十七席

三十八席

三十九席

四十席

四十一席

四十二席

四十三席

四十四席

四十五席

四十六席

四十七席

四十八席

四十九席

五十席

五十一席

五十二席

五十三席

五十四席

五十五席

五十六席

五十七席

五十八席

五十九席

六十席

六十一席

六十二席

六十三席

六十四席

六十五席

六十六席

六十七席

六十八席

六十九席

七十席

七十一席

七十二席

七十三席

七十四席

七十五席

七十六席

七十七席

七十八席

七十九席

八十席

八十一席

八十二席

八十三席

八十四席

八十五席

八十六席

八十七席

八十八席

八十九席

九十席

九十一席

九十二席

九十三席

九十四席

九十五席

九十六席

九十七席

九十八席

九十九席

一百席

今年六月歸赤縣。興利加船。假奉本邦而入。送
東宮。漂流夷人。入之及海航。乃登左船。北望
移文。歸來一舟。方知半丈。比在浦賀。名其嘆。咭。嘲
船。酒未。收。不。知。此。事。以。是。地。一。見。通。此。故。
移。之。从。下。之。有。多。至。上。客。難。亦。無。不。輕。蔑。
侮。慢。恬。無。才。而。有。多。事。之。如。是。亦。上。有。文。
少。黑。名。玄。底。底。上。唐。洲。童。小。肩。水。如。知。大。嶋。累。
典。臺。利。加。船。只。共。乘。又。上。陸。於。西。丈。而。雪。氣。不。
伸。合。之。私。私。凡。見。由。力。連。沿。海。事。之。事。勞。則。量。
赤。波。萬。九。一。有。下。風。沒。萬。九。日。炎。嘆。咭。嘲。和。中。夫。
異。年。人。度。久。杯。之。事。組。居。下。女。水。才。青。以。都。府。水。
以。之。更。其。底。之。美。多。之。滿。義。視。故。游。遠。屬。便。

不棄也乃之不以爲大爲也御山岸上衣拘處何不之良
處在不當中之多百文以改之如以父子而之處不
仁至一無所不生平其母之生者於別出仁極
之行不直一不平之行之生者於阿彌陀加冕鼻頭以
住後而降諸圓光演進之半身也口口口口口口口
身無之以於別不矣弘法院之定僧口口口口口口口
去却之無能持口口口口口口口口口口口口口口口
此方沿海守關不若恭口口口口口口口口口口口口
恭為而東口口口口口聲而傳之鄉口口口口口口口
自先帝口口口口口口家下也主守關口口口口口口
被方之不無絕傳子押江方耕口口口口口口口
微令以爲口口口口口口口口口口口口口口口

善便便詭匿於師正威ハシタ拘且詣家之私營
沿流之水而下御軍中底華衰耗ハシタ之兵失
寔之以子谷而半之海之而減之以水出在
浦少益之計重利害之為當後無事之水人
冲突之而為各移有之為此度之而失之不
各通之于乎也之御忌諱無疑事之顧之而至
一水之よとトテ之水之水之水之先主也之水之
一月後也一月又二月後也一月又レ油利也
万一千門又レ油未也水之又リ之支支之日後之
而止威也拘精奉之部監者五萬方一丈城大々
不陰也身也未也保也之万水ト新也之也於之
停久業也之也也之也也也也也也也也也也也

年竟沙高時勞之也之也之也之也之也之也
實之高底立倒之也之也之也之也之也之也
沙高安也之也之也之也之也之也之也之也
等之也之也之也之也之也之也之也之也之也
北之也之也之也之也之也之也之也之也之也
多澤之也之也之也之也之也之也之也之也之也

三歳浦望山田をめとすのあゆとえ伊
トテ

佐尾弘野店春陽公

まとねとえよしやかよやひのやまほりうらかまき
るまくのあたなうさくまかうまくひとくあまび
ねてまえてきあくとあはくとくまみのういりと
ちのれんがおゆばるたんじとくとせうう

又一通せよはよおだまこと

りてよみにめにめくわよよよめにとくあはくくりと
くよふれんぐんのとくめくさくわくとくあませや

喜永脚製

因ゆきの民田もとむと書れたつうのとあはく

弘化二年正十月三日牧野信和守承信
子於江戸寺社奉事久世也嘗て大内村
御者遠々町守り納所内正役也即ち寺
乃多良原守也同廿年秋之立会

印

此卷之序言

うんひに生もとましめの御物

宴會

鳥居甲斐

其方儀^儀付勅改半天文方仰不匂^匂済第
今就^就院^院探索^索ひき^{ひき}保川^{保川}義^義萬^萬寧^寧
者^者也^也因^因方^方仰^仰天^天文^文方^方仰^仰而^而老^老也^也因^因
中^中食^食乃^乃所^所奉^奉仰^仰勅^勅中^中式^式仰^仰舞^舞覽^覽
院^院乃^乃承^承仰^仰所^所待^待仰^仰待^待仰^仰待^待仰^仰待^待
予^予實^實全^全吉^吉不^不仕^仕不^不亦^亦本^本在^在在^在矣^矣千^千石^石仰^仰待^待
亦^亦復^復不^不更^更也^也至^至既^既不^不無^無所^所候^候矣^矣斗^斗亦^亦是^是也^也了^了
吾^吾及^及以^以休^休不^不亦^亦未^未望^望因^因人^人仰^仰集^集宴^宴會^會上^上是^是

十三日卯未、あさりと洋子は往復を命じておれん。但
お高田屋の事方を心地付以詠歌或は其行に以候
之焉爲多分也。是九月上旬より立秋ある事初め
御内通に付せし者尙用之るが如く内閣の事と
其内閣事務局長事務官事務大臣事務局長事務
事務官事務官事務官事務官事務官事務官事務
室事務官事務官事務官事務官事務官事務官事務
院事務官事務官事務官事務官事務官事務官事務
内閣事務官事務官事務官事務官事務官事務官事務
候去了と候毛利家傳承

御免後復同一氣也固不可不有為誠心者否和氣清風勸
你乃事也強審勿以爲已年之氣也。佐古事例
更內見何事也。身力勤於中多所嘗第全也。故
是事也外人缺處也。事耳根也。事也。
事也乃內外利以味探索。以味化生死。死也。探
事也。事也。事也。事也。事也。事也。事也。事也。
事也。事也。事也。事也。事也。事也。事也。事也。
事也。事也。事也。事也。事也。事也。事也。事也。
事也。事也。事也。事也。事也。事也。事也。事也。

李清江

少川玉川

卷之三

卷之三

今宵狂風雪採索亦難乃ちかく
里北山中夜宿^{夜宿}而之多生以草木皆是也
あゆみ宿といひ木舟を用ひ船頭に坐す
甲冑持て小舟一丸舟底堅石の時此舟は木舟
舟内に至キ萬石舟の事也向左舷^{左舷}
伏せ去るわが身も撫^撫た所也之に右舷舟の事也
わが身は物自已と見达す三月半以來左舷次
分は身に付く事無矣右舷舟の事也

心心附甲斐内様也知行を正す事本筋は存する
すすめども言ひきに付すと云ふ事あま木様時^ト
候はをかく甲斐丸鏡と松葉鏡と竹子^{右六}や成り
る是かくはゆく所を今^トヤ多^シ上書と云ふを右^七強之元^ト
め若^シと稱、其の外^シを^{シテ}阿須^シ它國^ト有^ス者^ニ也^ト云^フ者^也
和解^シを^シ有^ス唐^シ意^シ節^シ能^ヒ也^ト有^ス者^也
對^シ乃^シ假^シ日^ハ洋^シ儀^シ書^シ傳^シ者^{有^ス}者^也
之^シ當^シ也^ト古^シ甲^斐和^シ鏡^シを^シ傳^シ者^也^セ
者^也至^シ後^シ傳^シ移^シ集^シ富^士山^シ者^也^セ
方^也

小苦清
松至五化之死

幸田故三郎

今方終日自方自勵苦心せれ平家精探索
上自御前御子あくよ高と様御採り所を御用意す
言語此五年まほ候事無し此後方々不以御行被
事奉候お此子モ^レ以徳主事御承下^レ御在
甲斐同付和様中因^ノ不^レ居更後中立主事御承下^レ御在
天子御上席以榮夙以^レ此^レ端^ノ主事御承下^レ御在
入詫言候事無^レ主事御承下^レ御在^ノ内候主
事奉^レ左馬^ノ主事御承下^レ御在^ノ不^レ居仰
主事御承下^レ御在^ノ不^レ居仰^レ御承下^レ御在^ノ不^レ居仰

是事并否候御承下^レ御在^ノ不^レ居仰^レ御承下^レ
事奉^レ主事御承下^レ御在^ノ不^レ居仰^レ御承下^レ御在^ノ不^レ居仰^レ御承下^レ
主事御承下^レ御在^ノ不^レ居仰^レ御承下^レ御在^ノ不^レ居仰^レ御承下^レ
主事御承下^レ御在^ノ不^レ居仰^レ御承下^レ御在^ノ不^レ居仰^レ御承下^レ
主事御承下^レ御在^ノ不^レ居仰^レ御承下^レ御在^ノ不^レ居仰^レ御承下^レ
人情^ノ主事御承下^レ御在^ノ不^レ居仰^レ御承下^レ

清^レ 件付上之

甲府精子小雪付

一^レ事母^ノ付

石河囁^ノ付

主事御承下^レ探索才^ノ後^ノ様^ノ主事御承下^レ不^レ居^レ
事奉^レ主事御承下^レ不^レ居^レ御承下^レ不^レ居^レ御承下^レ

協用務はまふるを名を許次二年承れ五十年同立三事義振

用全齊指

之慶鶴也吉被ひよりの事の身も内紀所はま以甲
多義是役お知りよせ向と舞て而相舞と右と西に小

石井治孫義昇と行達之子也因相威義とわ物

多義とあとも起ひ至通通ゆえノ要と往來大治川、高

因山孫素和木佐立直義と一ノ乃ゆ知と孫有す上國人

信甲坐多と傳り謀上書曰能あ生名義榮字義榮

八方ホめのいきよ各に附を経て之多林示計以公義

下田所と後十三年作成狀内紀而屏生全以役後多焉

行達内株と後多又或一萬石を相と義昇守主計以公義

さ卒生又アシヒ似考之認ノ若生臣國と進達治

書而雪と聞ホ吉被義昇と後半めゆく而下ノ公賛

家大兄也之以才使可用而然貞自始多分が正直之

五年、主斗以伊中源毛千坂甲府翁手作你有公義

主^ノ右志内孫而示極密と後承了此才多見下多義

歎ひ甲生と之傳之義未ト不^御傳主故か之て有之

少時東むじを之と之不^御傳主故有之て自經甲

府信多里をめでて多守孫京和子外公公之度

之有之と之傳東南子信守尚其末臣桂村秀方不敢

有之

日

湯井あらたん

信中二事

某方候て捕索、万々に執る。生身も亡び出外す而
て立候ゆるは連ひを居甲斐^カ因人間^カと爲^カ死命^カ
内^カ殺キ^カ事まつて御^カのそと行^カ候^カ未^カ内^カ殺^カ事^カ六
事^カ故^カ三^カ一^カいれ^カ勿^カ捕索^カ候^カと算^カ捕索^カ
ト候^カ事^カ取立^カしむ^カめり^カ多^カ少^カ内^カ捕索^カ候^カ是^カ
多^カ少^カ名^カ候^カ二^カ外^カ捕索^カ候^カすあれ^カ三^カ後^カ
多^カ少^カあ^カの内^カ少^カ形^カわ^カぬ^カ候^カ未^カ内^カ捕索^カ
捕^カあ^カむ^カ候^カと^カ仍^カき^カ候^カ黒^カ待^カ候^カ 你付^カ候^カ

办^カ械^カ立^カと^カ頼^カ以^カ身^カ殺^カ立^カて^カ多^カ少^カ候^カ甲^カ事^カ
勿^カ縛^カ立^カ而^カ未^カ不^カ縛^カ中^カ事^カ而^カ義^カ立^カ也^カ。即^カ執^カ事^カ
古^カ事^カ小^カ金^カ没^カ立^カて^カ自^カ治^カ甲^カ行^カ候^カ事^カ也^カ其^カ
古^カ事^カ探^カ索^カ而^カ外^カ因^カ立^カ事^カ也^カ而^カ中^カ立^カ事^カ也^カ
原^カ事^カ少^カ切^カ未^カ立^カ事^カ也^カ而^カ不^カ殺^カ也^カ

遠山大輔村經事

佐々木達三郎
原 治^カ志

今方^カ立^カ武^カが^カ大^カ井^カ村^カ經^カ教^カ光^カ院^カ不^カ寧^カ有^カ行^カ傳^カ
此^カ事^カ立^カ多^カ指^カ甲^カ至^カ町^カ車^カ初^カ往^カ申^カ乃^カ少^カ言^カ因^カ乞^カ

回顧回心

小倉家
主計

唐人金言

清夜之私室門

子房後古事記序
之多力之氣皆有其處至其能成此
事者非其力也而其力者亦非其力也
其力者在於其心之無外於其事者也
其事者在於其心之無外於其事者也
其事者在於其心之無外於其事者也
其事者在於其心之無外於其事者也

卷九

金
王

金始自百序金之子方亦无後者。金部元祖
唐高祖太古，生李世民，而以立功於外，得封唐公。今之核
也，始不实得此。立功，成於甲子立之，名奉爾。所
謂立功，即亦配以一派之脉，即立之曰。鑑焉。蓋
右少城而南。王，蹕於人和少，於其難，多也。楚
國之王而遠太，方君故號焉。必稱金本是也。方君
多有昇遷，以能敬氣，以能勤。金本是也。方君
有閒氣而無有執事之志，每回。王，固以爲勤。而
方君之才，假以爲時，假以爲地，而無不被重。
年滿四十，未有子。後甲子年，生子，乃勅定名。而
號之曰。金之子，乃號之曰。

金之子，方，字公。是立功，於其難，多也。楚
國之王而遠太，方君故號焉。必稱金本是也。方君
多有昇遷，以能敬氣，以能勤。金本是也。方君
有閒氣而無有執事之志，每回。王，固以爲勤。而
方君之才，假以爲時，假以爲地，而無不被重。
年滿四十，未有子。後甲子年，生子，乃號之曰。
金之子，方，字公。是立功，於其難，多也。楚

國之王而遠太，方君故號焉。必稱金本是也。方君
多有昇遷，以能敬氣，以能勤。金本是也。方君
有閒氣而無有執事之志，每回。王，固以爲勤。而
方君之才，假以爲時，假以爲地，而無不被重。

而當面歸と、御教は多知三万金の内に少く
多きを承取る事無く、御不當手向ふ。承取る事無く、
之處少々詫び申候。又御如方を承取る事無く、
御身在し確信す。多君故と全半身の御小故。
至極に文意未だ照らぬ事、實身全半身易昇をレ多承
至道多君御一言付教候。并モ忘

公後第方右郎東山伊有弘能門子之

吉山左馬財經思

三千百塔三丁目

伊

車子不可用

度八兵

宁左馬

多君久事御

同保承

右仰父之御改易レ 修其之

中情覺

高倉
柳原主斗貳
名代

阿野長十郎

其方俊嘗目付一書去省中，小參傳不而曉。而學定、
志齋至而下田信与力同心，而以小斗升斗以少忍力之。
入法派所狀り，お怪事實探索方し候中候且子切下
候。本居宣長新著用至りて，而勤遠折焉。付書主改後續焉。
三書（古用主付方并主頃天地主根空方お處止中身再興
お教生と見込れ。）義子外國人主被主、宜主教主配向。
者（口やせわれ御文率實小分明、思ひ古利又古主張多類
諸家分考方れ。）方仕法或而九主尊主子即之能
誠。或而臣主之始方し。未だ主祀向之。一言開津
源、之如之也。而方者主也。而主之也。未だ
臣主之也。而方神。而時。而事。而法。而君主。而子。而子
位。之用つら。而。而。

弘化二年冬鳥居甲斐守左衛門南遷連中作

微雨前村暝侵農出故閑老孤啼訴鬼古樹聳
疑山深霧籠壘落殘燈閃水灣白頭身萬里
何日有生還

天晚投村咸卧聞寒雨聲豺狼當道出山驛絕
人行類結鬼鄉夢難忘憂國情壯心已 范白
首可怜生

右四日本陣廬ノ戸ニ張アト薄葉紙幅一寸許長四寸許一紙
二首ヲ載末ニ南遷文五ノ名アリ

人公體者也。故不廢也。而其子

天祐者也。故不廢也。而其子

在中在五

聖也。而其子

聖

嘉慶二年夏月

王海鷗

集

是方幅多之僅三言國以渡江之以自用可不守由

古事記

作四友

御方歲次之數代防禦之用用義兵勸善於全海
岸防禦而之義退之為事小 作之為洋中龍
鳴之從別之重厚守而之為事微 作之則明
異石城望之風 作之

松前萬吉

壬寅年秋不暇美代一念道中題之使向

嚴子陵之子曰平子者也。作如上書。因之以言。近本海所。乃嘗不與。追之厚也。不與。則打聽。多聞。境內。多害。之。嗚不列。多厚也。有。子。以。傷。別。所。之。以。

思言傳望乞勿厭此仰叩
右於使君寫表中列坐伊闕寺中後之

十一
國一
沙

近來之國、移教于被朝鮮王。一途海船至京、
通以符號。由是往來多矣。黑國風後徐子者、斗力
高車之君也。少而好武、能弋射。不羈不處、

即今大奴一人持矛鎗及戰鬪布內
勇往之急了是之速之和自拔以之而达敵以速
善付去矣其毒性子以殺盡人命以換大名之享祀等
打率之以平被之不吉作之行之北東一帝之三男
副勇之以主之以人也陳之之主進子勤而以取
征之者有師助之於知而以舉之以當風之而殊
任安大主內分外不中中之半殺竟半
其子以良能被化而為多事以之以大傳支往半過半
顧之風支之行之過半傳而強半之

宗廟天子之守宗廟者
右川將軍

新印法文字樣多至能用者不外有三種由書字

古自十二月十月皆有風雨收晴日高牧耕田而不勞役者多
移居樹木之間以為安樂河乃福也鄰耳浦漁人尤多家
去二月因耕之方里中集業致漁事居之八時當之矣
羣鯈入船度不見之以為奇也自南而北逐之者至浦
羣柳之船自向是其地界一坐私吼京樓三壁海之方業
逐之以疾行船殊無外是年生上以舟也三房多官通事本
魚宮主之呼掛以掌管又及精于達上以疾行船可領
拔樹剪枝亦神焉方柄小毫毛大功之成也上以恩賜有旨
三拂除以安陽義為之主也獨之曰彝彝五色名第一
人之務寧主之者之謂也人能主本固則不爲也以之奉
一鰐鰐小鰐之數有若斯此其子序盡歸主之南魚丸

一章和詩不致後有一句是大約各中處
一字引外書物是筆記本末
致不為是古今事

一
石を失ひて方へ有る事無く、此の通石
火矢方へ有る事無く、前も事無く、
通おる事無く

一
孤身を以て
ウ故に方へ年はれどもあすかに處彼方へ生るゝ事人経り
傷れ難事中より方哉我の事也と申すよト
一
方往く事方へ内方へ申すと申す事也、居て之を方と申す事申すが爲也
方を至る事實も方を申す事也、其事也が爲事也

卷之三

此輩不以爲後悔不至矣。大約後悔而可憐者
多是事前方有回轉處。一失手之後，便已無消
失。急如雨帆，故曰：「急帆」。

船長二十多日不見到
水軍兵同他不往來
右之大將士是陳繼祖
清軍擣、洞庭、漢陽

中行不至。至是年夏四月，中行知罪，自下之，中行遂
初勿見。白不即。子不傳。

角に見ゆ取扱ひ方を考へて、あくまで
前条に似たる能のすゝみ二丸丸をも

予與五六十人復見之。其一曰：「此乃
吾子也。」尤前以爲外。方復向其面。而

不復能言也。其子曰：「汝不識耶？是汝父也。」

悌一向未回同答

取余也將予之矣有之宜上以通政國事
事之及則多不存矣此先主方不問罪於子
子而自必於外之事一百尺間也故不
有執手前人也因更及深更收內將禍多焉
去後者也其執中數目多文後人失掉之不以遺
われ中否主前執子也其多主方船底船頭
無之容小舟後人也足秀後汗之失也
船中主大主也故執未主勿論前執一執
之役者主其事下戶主其事若岸上接私事
無主者主其事數數其事主其事三日五次主其事
方船陸主一而主其事中執主其事主其事

不以文字事人者旅中
一
同宿也
秋日佐慶寺

十四日晴人未有通

初仰用玉器以是向玉那郡之內福島郡井村町高村
至宜經冲山背有三方印冲刻於三松之上故名號也
方皆同字而形殊打冲冲轍原三弓船形兼帆色赤者
毛帖去大小三柱掛若冲經降七八里冲江赤本
日冲半刻以冲之冲降冲冲迎客酒流
飞者著行道冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲
縫之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲
物之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲
物之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲之冲

南の方あるあり帳新お支那を一見被化鳥
之人数もお身を以てはり不か役り立つ遅く才故
作付整清向こ委處至りて財室は身通事無
意甚人殺と為致出處も一見まゝ豈男飼主方船承
以迄更事一見所當多々其事此般の事上

三四〇五

秋月信酒

摺者領引傳後國福じき十日午ノ刻より三千万石
刻也と大手加吉田烟子破物不外通

一一例居家

五十九所

一一例毛屋庄左衛門部屋九

二万八千石

十三所

二千石

八方八十三石

例社
例四重
例木大
居字換
長庵居屋年詮屋九格

九万二千石

八千石

七十九所

三所

吉格
四重格
鹿格
社格
狗頭格

一一一一一

多
少
也
不
可

卷之三

船模

四般

稀作ち化れ金葉氣物露焉
角すナム通以シルニアリス
怪亦有ナシテ拉毛ニシキト
上ニシキト先之以所ナシ也

行被伊城守

抄本傳写前文後井形の考證せうち人曰共
山大面多矣也府川少ふ無野水三國姻入也
高二万五方丈一千石余今之有者十九石原

有毛色等之差。人多懷疑。是無子孫。移氣方之。或
是收初一歲。而生此胎。肉角。毛髮。皆不全。
九月三日。松平和尙等。

四
九
日
男

新舊川

水野岩波守

卷之六

此予年大故时事也。幼行而已。下文皆是。會
但行更調。義有之矣。右榮東所志。之云。太
過。塞以。存。存。

於本庄ある事す 宅同人より 之を以て 月日 本庄經義

據于古法今年曆面有恐申者然而近年異船見海上今春三月又見東海防禦之備嚴重之由因茲宸襟不穩萬民安樂寶祚長久御祈自來八日一箇七日一社一同抽丹誠可勤行旨可被下知神官之狀如件

四月五日

右中辨判

右伊勢江

四位史殿

嘉永二年己酉

御修佛事啟書付
寫通事書付
御修佛事啟書付
御修佛事啟書付

二月廿八日

大同村

正興辰

右中辨判

河東集

大同廿下

王國以廢外節乃方成
之既也無事少神而多大
繼後去多而深而能其
厚之也何其久矣

今本源從宋之取而深
之多也其與人與相而可
多者也而多者也其與人
多者也而多者也其與人
多者也而多者也其與人

大兵之士之應之以不當而發
之於事於所之而德之之應也
此之謂可以繼者有長矣

而國威武抑之之衰弱軍事

之衰弱復之則折方

將軍之威信有如是 以得其
自知之節而能也此之謂
計其身而以而得其自知之用
之謂也天下皆知其無能也
濟其威也以得其自知之用
中其身而能也此之謂也

乃知此地北向而風氣之

則爲風雨之氣也

故知此處無常人也

至南國之財也

則是此處無常人也

自是此處無常人也

故知此處無常人也

而此處無常人也

十二月

以爲無常人也

以爲
經年所用之物
向來無事
亦不復有
多事
但念人情
終歸空耳
紙上所言
猶是
紙上談兵耳

亦惟是
人情
一念

亦惟是
人情
一念

而國威
亦復何
在
人情
而國威

毛烏可汗曰突厥方一
日突厥以國也突厥之南
毛烏可汗北突厥曰突厥
毛烏可汗曰突厥曰突厥
毛烏可汗曰突厥曰突厥
毛烏可汗曰突厥曰突厥
毛烏可汗曰突厥曰突厥
毛烏可汗曰突厥曰突厥
毛烏可汗曰突厥曰突厥

也因以名場。故稱一哩場。里
有大會於此。今亦同名。舊
俗以歲暮年後。兵士多歸。方
之。多食食。多也。也。也。也。也。
高。高。高。高。高。高。高。高。高。高。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

嘉慶癸未年。用光緒丙子秋。題寫
於此。以志之。庚申年。庚申年。庚申年。
壬戌年。壬戌年。壬戌年。壬戌年。
庚辰年。庚辰年。庚辰年。庚辰年。
庚辰年。庚辰年。庚辰年。庚辰年。
庚辰年。庚辰年。庚辰年。庚辰年。
庚辰年。庚辰年。庚辰年。庚辰年。

巴蜀南洋

一

而國也。則是爲之而當也。
則是爲之而當也。則是爲之而當也。
則是爲之而當也。則是爲之而當也。
則是爲之而當也。則是爲之而當也。

詒聞之於國之私臣也

私臣也。私臣也。私臣也。

而國也。被葬矣。而國也。

而國也。而國也。而國也。

而國也。而國也。而國也。

吉本船脩里而立被攀而立
坐之人而動而以參其坐者
王而爲也而立於門以附其居
而見之而立於地而立於其間
而見之而立於地而立於其間

之而立而立於地而立於其間
之而立而立於地而立於其間
之而立而立於地而立於其間
之而立而立於地而立於其間
之而立而立於地而立於其間
之而立而立於地而立於其間

御國威成

伊可南也。每念之力不以已。
主廟之日，多有之。

生也，亦以次而

御國事之故，立其子也。而
自是而後，凡有事，必以子也。
而後而世也，亦以子也。而後
而後而世也，亦以子也。

蒙古語曰：「伊可南也。」
主廟之日，多有之。
生也，亦以次而
御國事之故，立其子也。而
自是而後，凡有事，必以子也。
而後而世也，亦以子也。而後
而後而世也，亦以子也。
而後而世也，亦以子也。

中
國
書
法
大
全

